

2020年7月の星空



7月7日は七夕と言われていますが、伝説では年に一度、おりひめ星とひこ星が天の川を渡って会うことのできる、特別な日です。

せっかくの七夕ですから、夜空を見上げて、おりひめ星とひこ星を探してみましょう。

7月7日前後の午後9時過ぎ、東の空を見上げると、いくつか星が見つかります。

とくに明るい2つの星が「おりひめ星(織姫星、織女星)」と「ひこ星(彦星、牽牛星)」です。北寄りにあり、先に昇ってきて高いところに見える明るい方の星がおりひめ星です。



おりひめ星は西洋の名前で言うと「こと座」の「ベガ」、ひこ星は「わし座」の「アルタイル」です。さらに、おりひめ星とひこ星のほかにもう一つ明るい星が、左の方にあります。「デネブ」と呼ばれる「はくちょう座」の星です。

これら3つの星は星々の中でもとくに明るい「1等星」で、3つを結んでできる大きな三角形が「夏の三角形」です。

ところが、7月7日はたいてい梅雨のさなかで、なかなか星も見られません。週間予報でも7日は雨の予報です。また、日没も遅く、宵のころ東の空の低い位置にあるので見づらい。もし晴れたとしても、5日が昇りだしたので、**8月25日の夜空**でなかなか星も見られません。

もともと七夕の行事は、7月7日といっても現在使われている暦ではなく、**旧暦**など太陰太陽暦の7月7日に行われていました。これは、月齢およそ6(半月・上弦の月)の月が南西の空に輝く夏の夜になります。

今年の旧暦7月7日は**8月25日**。8月19日が新月。

天の川をはさんで離れ離れになっている「おりひめ星」と「ひこ星」。おりひめは月の船に乗って、ひこ星に会いに行ったのかも？

おりひめ星とひこ星を探してみましょう。

ちなみに7月7日は、1937年盧溝橋事件をきっかけに日中戦争が始まった日です。その後中国で何をしたのか？(南京大虐殺、731部隊、八紘一宇、重慶への無差別爆撃など)調べてみましょう。

ということで、7月7日は「平和を願う日」です！

7月12日 月と火星が接近

7月12日の未明から明け方、東南東から南東の空で月と火星が接近する。

7月12日の未明から明け方、東南東から南東の空で月齢20の下弦前の半月と火星が接近して見える。

3か月後に地球と最接近する火星はマイナス0.7等級まで明るくなっており、半月に負けることなく目立って見える。肉眼や双眼鏡で眺めたり、写真に収めたりしてみよう。また、この日は明け方ごろに**東の低空で金星とおうし座の1等星アルデバランが大接近**しているの、こちらの接近にも注目したい。月と火星の次回の接近は8月9日から10日。



7月17日 細い月と金星が並ぶ

7月17日の未明から明け方、東の空で細い月と金星が並ぶ。アルデバランも近い。

7月17日の未明から明け方、東の空で月齢26の細い月と金星が並んで見える。

地球照を伴った幻想的な細い月と金星の共演は、数ある月と惑星の接近の中でも随一の美しさだ。**近くにはおうし座の1等星アルデバランやヒヤデス星団**が、上のほうにはプレアデス星団(すばる)もあり、にぎやかな光景となっている。肉眼や双眼鏡で眺めたり、写真に収めたりしてみよう。また、このころには**全惑星が明け方の空に見えている**ので、他の惑星にも目を向けてみたい。月と金星の次回の共演は8月16日。



7月下旬 明け方の空に全惑星が見える

7月中旬から下旬にかけて、明け方の空で、水星から海王星まで全惑星を見ることができる。

7月16日ごろから26日ごろまで、明け方の空に水星から海王星まで7惑星が全部見える。一度に全惑星を眺めることができるという珍しい機会だ。さらに19日ごろまでは下弦過ぎの細い月も同時に見える。

タイミングは日の出の1時間前から30分前くらいの約30分間となる。これより早いと東北東の空の水星が低すぎて見づらく、反対にこれより遅いと南西の空の木星が低くなってしまふ。見晴らしの良いところで観察しよう。また、天王星と海王星を見るには少なくとも双眼鏡が必要となる。**「ステラナビゲータ」や各種モバイルアプリ**で位置を確認し、なるべく空が暗いうちに見つけよう。

一度に見るという制限を外せば、宵のころに木星と土星を見ておき、空が暗い時間帯に天王星と海王星を見つけて、明け方に水星を探せば多少は見やすくなる。肉眼でも水・金・火・木・土星(と地球、月)は見え、双眼鏡や天体望遠鏡なら木星のガリレオ衛星や土星の衛星タイタンなどまでも観察できる。ぜひ一晩のうちに、なるべく多くの太陽系天体を見つけてみよう。

